



2012.2月

ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。ご不要の場合はお手数ですがご返信くださいますようお願いいたします。

INDEX

- 1.不定期掲載 障害論と支援論 佐藤幹夫氏
第1回 「動的平衡」と支援
- 2.越年冬祭り
- 3.平成23年度厚生労働省社会福祉推進事業

♪ 不定期掲載 障害論と支援論 ♪

はじめに

2009年2月、佐藤氏に当会の相談室顧問となっただいてからもう3年になります。その間、対人援助の様々な状況についてご相談させていただきました。

昨年7月からは、職員研修を目的として、佐藤氏の著作『「自閉症」の子どもたちと生きてきたこと』をテキストにした読書会を毎月2回（計22回）実施しています。

佐藤氏の語る対人援助論から職員は多くを学んでいるところですが、当メルマガでも今号から、佐藤氏のエッセイを連載することとなりました。ご期待ください。

第1回 「動的平衡」と支援

佐藤幹夫

1. 「障害者」「ホームレス」、言葉と配慮性の問題

東京・山谷地区を中心に活動する特定非営利法人「自立支援センターふるさとの会」から声をかけていただいたのは、2008年の暮れごろだったと思う。社会的貧困、格差社会、派遣切りなどがさかんに言われ、東京・秋葉原での連続殺傷事件がおこった後だった。そのとき、二つの話題が私を動かした。

一つは、ホームレス支援という枠で、メンタルケアをしていきたいと話していたこと。もう一つは、「ケアをする人へのケア」の重要性を訴えていたこと。相談室を開設し、この二つの新しい取り組みを始めたいので手伝ってもらえないか、というのがそのときの依頼の趣旨だったと記憶する。

少し迷ったが、その場で承諾した。

私は、2001年に教員を辞して後、細々と、もの書きを生業として生活を営んできた。ホームグラウンドは「発達障害」である。発達障害と一言でいっても内容は多岐に渡り、特別支援教育の現状について、精神科医療のありかた、卒後の生活支援と福祉をめぐる、法を犯す障害者たちと司法、司法精神医学の諸問題など広範な領域に及び、すでにこれらの問題にどっぷりとかかわっていた。加えて、高齢者の医療・介護、認知症という課題にも深入りし始めていた。

「自立支援センターふるさとの会」は、10年ほど前から山谷地区を拠点として、ホームレスの人びとの支援をおこなってきたNPO法人で、現在は広く、台東区、墨田区、新宿区を中心として先駆的な事業を展開している。ホームレス支援の根幹である住居保障や生活保護関係について私はまったくのシロウトであり、よく知らぬままに首を突っ込むことに自重する気持ちが強かった。しかし既述した二つの話題に動かされ、結局、受諾させてもらうこととなった。

以下はその理由であるが、少し回り道をすることになる。

言葉に対するちょっとしたこだわりが、私にはある。たとえば、何のためらいもなしに「障害者、障害者」と連発されると、ちょっとなあ、と引いてしまう。たしかに「障害」は彼の小さくない属性である。しかし全体ではない。ましてや彼の人格でもない。あくまでも彼の一部である。しかし「障害者」という言葉には、あたかもそれが彼のすべてであるかのようなニュアンスが貼り着いている。100%、どこからどう見ても、1日24時間1年365日、障害である。——無雑作な連発から、そのような発話者の人間観が、私には感じられてしまうのである。

もうひとつ、こんな例もある。「精神病院」という言葉が最近使われなくなっていることをご存じだろうか。代わりに「精神科病院」と記載されるようになっていく。「精神病院」という言葉には、これまでの多くのネガティブな歴史がつきまとっていることは、同意していただけるだろうと思う。しかし昨今、病院施設のありようも、精神科医療の内実も、10年前とは比べられないほど開かれており、かつてのイメージを払拭したい、という動機がそこには含まれているのだろうと推測される。

「ふるさとのかい」とかかわるようになった当初、同じように、「ホームレス」という言葉が無自覚に濫発されるようなときに、ちょっとした違和感を覚えた。なぜか、はっきりとした理由は分からない。私自身が口にするときには、少し遠慮勝ちになっていた。

どうして、「ホームレス」という言葉を使いにくい、と私は感じるのだろうか。路上や公園、空き地でテント生活している人たちを「ホームレス」と呼ぶことに、何の問題があるだろうか。そこまで考える必要はないのではないか。そのような疑問をもつ方もいるだろうと思う。当然である。

わざとらしい「善意」は何よりも醜悪だし、おかしな言い換えは本質を隠ぺいする、矛盾を見えにくくする。そうした見解が正論であることを、私は一定程度は認めるものだ。そのことを認めたくなくて、できればあまり使わないで済ませたい言葉のリストのなかに、ホームレスという言葉もおさまり、以来、それは続いているのである。

といて、ある特定の言葉は「差別語」だから、使ってはいけないというような、いわゆる「言葉狩り」に類したことを主張したいのではない。これは、私にとってはできれば避けたい言葉だという、あくまでも、個人的な居心地の悪さの表明である。

言い換えが、新たな居心地の悪さを再生産することもある。

たとえば、昨今しきりと目にする「障がい」「障がい者」という言葉を使う趣味は、私にはない。「害」という字がよろしくないから「障がい」とする、という理由で(たぶん)行政用語となり、そのまま一般にも広まったようであるが、では「障」の字はよいのか。へそ曲りの私は、ついそう考えてしまうのである。

「障」は「月の障り」といった用法があるように、いい意味でばかり使われているわけではない(さまたげ、さしつかえ、病気になる、といった意味があると辞書に記載されている)。「害」の字が、当事者を貶めるイメージがあってよろしくないというのなら、「障」も同様によろしくないはずだ、というのが、筋の通った主張というものだろうと私には思われるのである。

それなら、と考えたのだろう。「しょうがい」とすべて平仮名にして記述する例も、ごくわずかではあるが見かけることがある。しかし「しょうがい者」という記載はいかがなものだろうか。

かつて「ちほう症」や「精神ぶんれつ病」としていた例も見ることがあるが、そうやって平仮名にして済ませておこうとするのも、また、私の趣味ではない。というか私の感度では、逆に、これではご本人をバカにしているんじゃないか、と感じてしまうのである。

ではどうするか。特に私自身に有効な手はない。知人の児童精神科医は「障」を書くことを常としているが、これはこれで一つの見識であって違和感はないが、私自身は「障害」のままである。本稿がそうであるように、せめて「」でくくって表記することにしているが、これもケースバイケースである。

整理してみよう。

かねてより、「障害者」という言葉が、あたかも当然のごとくくり返される場面に出くわすと、違和感を覚えた。同様に、「ホームレス」という言葉も節度をもって使った方がよくはないかと、私のセンサーは働いた。これがなぜだったのか。

まず、かつての言葉狩りのように、言葉の一律規制を強制する主張には、私は反対する。しかしながら個々人の判断で、節度をもちたい、場合によっては控えたい、とすることには反対しない。これは基本原則である。

では、無自覚に濫用濫発されると違和感を覚える言葉を、平仮名で表記すれば違和感は解決するのかといえば、必ずしもそうではない。「障がい」も「しょう害」も「しょうがい」も、私の鈍い感度にあっただけでさえ、ご本人をバカにしたような、こんな日本語は使いたくないというセンサーが働くのである。繰り返すが、これは私自身の個人的な自戒である。

では、「ホームレス」という語になぜ抵抗を覚えるのか。そんなちょっとした問題が、「ふるさとの会」に出入りさせてもらうようになって、最初の宿題となった。

さて、何を私はこだわっているのだろうか。

[続き](#)

◆筆者紹介

佐藤幹夫氏

1953年秋田県生まれ。養護学校教員を20年以上勤めた後、フリージャーナリストとして活動。おもな著書に『ハンディキャップ論』『「自閉症」の子どもたちと生きてきたこと』『自閉症裁判』『十七歳の自閉症裁判』『ルポ 高齢者医療』などがある。批評誌『飢餓陣営』主宰。更正保護法人同歩会評議員。自立支援センターふるさとの会相談室顧問。

♪2011～2012越年冬祭り♪



2011年12月29日から翌年1月3日にかけての6日間、毎年恒例の越年冬祭りを開催し、隅田川周辺で路上生活を送る方々に向けた炊き出しを行いました。例年通り、午前中に調理し午後配るという作業に多くの方のご協力をいただき6日間で約1800食を配ることができました。年末年始のお忙しい中、大変ありがとうございました。

より詳しいご報告は下記をご覧ください。

[ふるさとの会冬祭りのご報告](#)

♪平成23年度厚生労働省社会福祉推進事業 第1回研究委員会♪

今年度も厚生労働省社会福祉推進事業が始まりました。平成23年度の事業名は「重層的な生活課題（「四重苦」）を抱える人の地域生活を支える〈居場所〉と〈互助〉機能の研究」です。実施に伴い、11月24日（木）に第1回研究委員会を開催しました。

近年、様々な理由から就労が困難になっている若年稼働層、また地域とのつながりが少なく、孤立しがちな独り暮らしの高齢者に対して、社会的にも注目が集まっています。この点に関し各委員より、地域で雇用をつくり、就労を支援することの多様な意義と可能性について。また地域で独り暮らしをされている単身高齢者の住宅やまちの在り方など活発に意見が出されました。

今後は、本事業に関わる調査を実施しつつ、委員会も定期的を開催していきます。さらに事業の成果に関しては、報告書の作成とシンポジウムにて行う予定です。

発行元：特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会
〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6
TEL：03-3876-8150 FAX：03-3876-7950
E-mail：info@hurusatonokai.jp
HP：<http://www.hurusatonokai.jp/>